

放課後怪奇くらぶ リプレイ

学校のおにんぎょう

沢渡祥子

1.

1. はじめに
2. SCENE 0 : 生徒紹介
 1. ■香取 菊子 (かとり・きくこ)
 2. ■副島 澄子 (そえじま・とうこ)
 3. ■聖 麻希 (ひじり・まき)
3. SCENE 1 : オカ研の課題；リサーチ『願いの叶う絵』
4. SCENE 2 : 静物画／日本人形
5. SCENE 3 : まだ上げ初めし前髪の
6. SCENE 4 : コクハク
7. SCENE 5 : 嵐の前の
8. SCENE 6 : ヒトガタの絵、人形の目
9. SCENE 7 : 神の社で出会った人と
10. SCENE 8 : そして、遭遇
11. ENDING

はじめに

この本は、テーブルトークRPGのプレイです。システムは「放課後怪奇くらぶ」。「クトゥルフの呼び声TRPG」に連なる、学園もののTRPGです。

「テーブルトークRPG」及び「プレイ」に関する説明は、ここでは省きます。テーブルトークRPGわからないという方は……申し訳ありませんが、ここを読んでみて、感覚的に理解できるというならばよし、わけがわからないという場合は、上記キーワードで検索でもかけてみてください。

今回は4人で遊んでおり、3人がそれぞれ自分の「キャラクター」を操作し、一人が物語の進行役を担っているという形です。

では、今回のおはなしへー。

SCENE 0 : 生徒紹介

■香取 菊子（かとり・きくこ）

2年7組／女子 陸上部部員（砲丸投げ）

【能力値】STR17／DEX10／INT15／CON9／APP11／POW11／SIZE11／EDU12／SAN50（元値55）

怪奇現象への遭遇率は高いけれど、相変わらず怖いものは『嫌い』らしい。平和な生活に戻るのが望み。

■副島 澄子（そえじま・とうこ）

2年7組／女子 オリエンテーリング部部長

【能力値】STR14／DEX13／INT18／CON8／APP11／POW11／SIZE14／EDU16／SAN53（元値55）

部員数が少ないオリエンテーリング部をまとめる頑張り屋さん。怪奇現象には耐性ができつつある様子……（笑）

■聖 麻希（ひじり・まき）

1年5組／女子 オカルト研究会会員・オリエンテーリング部かけもち部員

能力値：STR11DEX12／INT10／CON14／APP11／POW8／SIZE9／EDU15／SAN37（元値40）

見た目は可愛らしいが、骨の髄までオカ研部員。怪奇現象に興味津々な怖い者知らずさん。

SCENE 1 : オカ研の課題；リサーチ『願いの叶う絵』

舞台はオリジナル設定である黄泉市にあるありふれた高校。

名前を『黄泉高校』といいます。

これはごく普通に高校に通う普通の高校生3人が、ちょっとした怪奇現象に巻き込まれるお話です――。

まず導入1人目はオカルト研究会部員、1年生の『聖 麻希』。

キーパー：ゲーム内の暦は12月5日。麻希ちゃん、あなたの所属するオカルト研究会では、放課後のミーティングで次期部長についての話し合いがあります。会長代理の先輩が、「1年生に会長職を譲る前に、あなた達2人が今後ちゃんとやっていけるかどうかを知りたいの」と。

澄子：ど、どう見るんだろう？

キーパー：「1年生2人で共同研究をして、あなた達なりの結論を出してほしいの。議題は今、3年生の間に広まっている、『願い事を叶えてくれる絵』について調べること」

麻希：へえ。

キーパー：「まあ、調査結果は『本当かどうか』より『本当に見えるかどうか』が重要なんだけどね」（笑）

麻希：もちろんその方が面白い！

キーパー：「民放番組みたいに『果たして真相は！？ ばばーん！（効果音）』って感じでまとめるの。誰から広まったのか、噂の元になった出来事があるのかどうかとか……。いかにオカ研っぽく調査書をまとめられるかがポイントだよ」（笑）

麻希：なるほど、いかに事件をでっちあげるか、か。

キーパー：「でも嘘を書いちゃダメなんだよ。『やらせ』って言われたらおしまいだからね」（笑）

麻希：大丈夫です！任せてください！

キーパー：ちなみに議題を出されたオカ研部員1年生はあなたともう1人です。共同研究の相手は、一年生の熊谷知晴君っていう男の子。彼はオカルトよりはUFOとかUMAとかが好きらしい。中肉中背よりちょっと細めで、眼がちっちゃくて大人しい印象なんだけど、UFOとかの話になるとちっちゃい目をカッと見開いて……。 （笑）

麻希：わかりやすいなー。

キーパー：クラスでは目立たない普通の奴。どうしてオカ研なんかいるんだろう、って見られている。けどオカ研部員は知っている。奴に語らせたらいけない。

麻希：頑張りましょう！ がしっ（握手）。

キーパー：がしっ（握手）。彼は「噂の出所を調べて、誰が言い出したかを調べるのが最初かな。まずはそれぞれ自分で調べてみようよ」と言いますね。

麻希：言い出しっぺは誰か、か……。

2人目の『副島 澄子』。2年生。弱小オリエンテーリング部を支える、しっかり者の女の子です。

キーパー：放課後、澄子ちゃんはオリエンテーリングの部室に行くよね。でも今日は誰もいません。かろうじて太った先輩がいたんだけど、「俺、そろそろ帰るよ」って。

澄子：ちえー、つまんないの。先輩もついに卒業なのかなあ。

キーパー：「卒業したいよ〜」（笑）

澄子：先輩がいないと淋しいなあ。

「太った先輩」はオリエンテーリング部に在籍する澄子の先輩で、おおらかで楽しい3年生です

。今までは特に何か事件に巻き込まれるというわけではなく、部活光景を演出するNPCだったわけですが.....。

今回は、先輩にもたっぷり「渦中の人」になってもらう予定だったり。

3人目の名前は『香取 菊子』。2年生。陸上部所属の、活発で元気な女の子です。

キーパー：菊ちゃんは放課後は陸上部ですが.....今日は外が使えないので、部活も短めで終わっちゃいます。

菊子：冬だもんね。廊下走っていたりするんだ。

キーパー：部活終了後、笹口咲良さんという子があなたに小声で声をかけてきます。隣のクラスの子で、今まであまり接点はないんだけどね。背の高めな子です。「香取さん、ちょっと相談事があるんだけど、いい？」

菊子：え？ うん、いいけど.....。

キーパー：「人の来ないところ、ないかな.....」

菊子：（かなり身構えて）なに、なにになになに！？ 何の話？

キーパー：「いや、うーんとね.....」と、赤くなってもじもじしてます。（笑）

菊子：あ、そっち系か！ それなら、って人のいない教室に移動します。

キーパー：笹口さんは「あのさあ.....。香取さんて、オリエンテーリング部に入入りしているよね？」

菊子：あ、うん。お茶もらいに行ったりとか。

澄子：（ぼそぼそと）入部希望.....？

麻希：（同じくぼそぼそと）そういう雰囲気じゃないと思うけど.....？

キーパー：「.....オリエンテーリング部に、ちょっと体の大きな3年生の先輩、いるじゃない？」

菊子：いるよ。なんか、変な人だよ。

キーパー：「.....」

菊子：あ、独特な人だよ。

キーパー：「あの人ってさ、付き合っている人とかいるのかなあ？」（笑）

澄子：いやーん。（*^▽^*）エ

菊子：いないんじゃないのかな？ 今度一緒に行ってみる？

キーパー：「えっ。えっ。えっ。だ、だっ、あのっ.....」

菊子：変じゃないよ。私の友達だ、ってお茶飲みに行けばいいし。

キーパー：「ううん、あのね、その前に.....香取さん、先輩に彼女がいるかどうか聞いてきて？」

菊子：.....私が？

キーパー：「いるかいないかだけでもいいから.....。もうじき3年生来なくなっちゃうじゃない？ だから、どうかしなきゃな、ってずっと思ってたんだ.....」

菊子：.....おっけー。聞いてくるよ。——じゃ、早速オリエンテーリング部に行ってみよう。（笑）

【システムについて】

放課後怪奇くらのシステムは、ルーンクエストやクトゥルフと同じBRPシステムです。

基本の判定ダイスはd100%。たいていの場合、小さい出目の方がいい結果が出ます。

技能がある時は（技能値%）、それ以外の判定は（能力値×5倍%）が基本の判定値です。

SCENE 2 : 静物画／日本人形

舞台はオリエンテーリング部の部室。

先輩に用事があったり来た来た菊子と遊びにきた菊子、「うわさ話」の情報収集に来た麻希が遭遇。
話が早くてキーパーとしては非常に助かります。
あいにく3年生は誰もいませんでしたが、話の流れで麻希は澄子相手に相談などしはじめました。

キーパー：時間は5時半くらいかな。

麻希：（唐突に）澄子先輩、3年生っていろいろ噂があるじゃないですか。おまじないとか。

キーパー：澄子ちゃん、アイデアロールを振ってみてください。

澄子：（ころころ）出た。13。

【アイデアロールについて】

INTの5倍を目標値に判定をすることを、アイデアロールといいます。
何かに気づいたり、閃いたり、ある事象に気づくかどうかの判定に用います。
澄子ちゃんのINTは18あるので、アイデアロールの目標値は90（高っ）です。

キーパー：「願いの叶う絵」という話は聞いたことがありますね。特別教室棟の1階にある日本人形の絵らしいよ。

澄子：日本人形か！ 行かない行かない、絶対行かないっ。

麻希：一緒に行きましょう！（笑）

澄子：いや、一人で行ってきてよ！あ。それとも、今ここで次期副部長になってくれると約束してくれるなら、私も一緒に行ってもいいよ。（笑）

麻希：ああ、別になってもいいですけど.....オカルト研とかけもちですよ？

澄子：ホントにいいの！？

菊子：私はここでお菓子をもらって待っているよ(・_・)〃〃〃〃〃。

キーパー：2人で見に行くの？

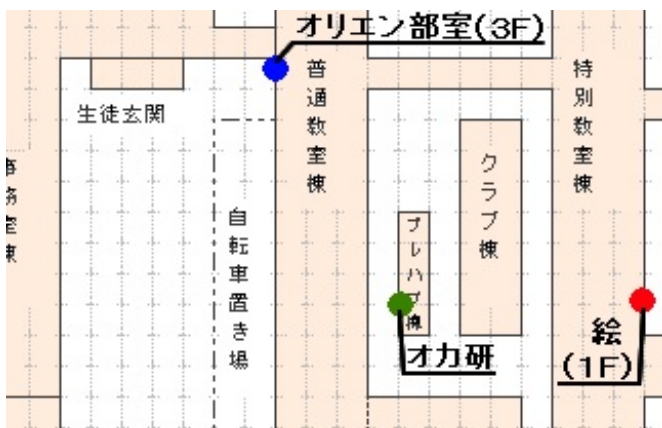
麻希：当然カメラは持っていきますから♪

澄子：麻希ちゃん、イキイキしているね。

麻希：そうですか？ できるだけ表には出さないようにしているんですけどね♪

というわけで、菊子を部室に残したまま、麻希と澄子が問題の絵のところに行くことに。

キーパー：絵は特別教室棟の奥の廊下の壁に掛かってます。.....で、目的地より手前の渡り廊下の角まで来た時、絵の前に背の高い女の子が立っているのを見ます。



菊子 : あー.....行けばよかったかな、面白そうだなー。

キーパー : 彼女はしばらくそこにいるけれど、何もなければそのまま行ってしまいます。靴紐からして2年生のようですね。

澄子 : 見たことはありますか？

キーパー : 幸運ロールをしてください。彼女とは接点ないし、マイナス20くらいしてもらおうかな。

澄子 : (ころころ) 知らない人だ。.....やっぱりお願い事していたのかなあ。

キーパー : 絵の前まで行くよね。絵はハガキサイズの紙に水彩色鉛筆で描いてあるもので、絵よりもふたまわりくらい大きな額に入っています。こんな感じ。(と、資料写真を出す)これが絵になっていると思ってください。(笑)

澄子 : ひゃああ怖いよー！ どこから持ってきたのこんな怖いの一！？(笑)

麻希 : とりあえず写真を撮ります！ しばらくじっと見えていますよ。

澄子 : 麻希ちゃんお願い事？ と思いながらとりあえず見守る。

キーパー : 2人ともPOWで判定して1倍以下が出たら教えてください。

澄子 : (ころころ) だめ。

麻希 : (ころころ) 出ない。

【能力値判定について】

能力値を使って判定をする時は、『能力値の何倍以下の数字が出たか』で判定をします。特に何も無い時は、『能力値の5倍以下』で判定してもらうのが標準難易度です。今回は特に難しい状況なので、1倍以下ということで.....。

キーパー : 次、まじまじと見ている麻希ちゃんだけ<目星>で判定してください。

麻希 : (ころころ) 出ない。確率は半々なんだが。

【技能判定について】

キャラクターが持っている技能を使う時は、技能判定を行います。

例によってd100の%判定で、以下が出れば成功です(今回の目標値は50)。

<目星>は捜し物をする時や異常に気づく時に使う技能で、かなりよく使います。

キーパー : 了解。人形は赤地の着物に黒っぽい帯を締めてます。右下に漢字で「香」って描かれています。——わかるのはそのくらいかな。

麻希 : この「香」って何でしょうね？

澄子 : 描いた人の名前かな、この人形の名前かな？

麻希 : とりあえず、お願い事してみませんか？(笑)

澄子 : 私はちょっと離れたところで見ている。(笑)

麻希 : じゃ、『私たちに霊体験をさせてください』(笑)

澄子 : 『たち』って言うなー！

麻希 : じゃ.....わかった。『あなたの秘密を教えてください』(笑)

キーパー : <正気度>のチェックをしてもらおうかなー。

麻希 : えいっ。(ころころ) 正気度は成功なんだよな。

キーパー : 低いのにね。じゃ、一瞬くらっ吸い込まれそうな気がしたけど、それだけでした。

【正気度(SAN値)について】

キャラクターが、超自然的現象を目の当たりにしたときにする判定が『正気度チェック』。判定に成功=恐怖に耐えた、あるいは恐怖から自分の精神を守ったことになります。

SCENE 3 : まだ上げ初めし前髪の

キーパー：翌日12月6日（水）。授業は何事もなく済んで今は放課後です。――菊ちゃん、笹口さんが声をかけてくる。

菊子：おお、忘れていたよ！――ごめん、昨日は先輩いなったの。（笑）

キーパー：「……そっか（落胆）」

菊子：ごめん。早めに聞く。

麻希：今日は速攻でオリエンテーリング部へ！

キーパー：「ごめんね、ありがとう。あ、でも私のことは言っちゃだめだからね」

澄子：……純粹に興味ですが、笹口さんってきれいな子？

キーパー：APPでいえば皆さんと同じくらい（数字でいうと11）。でも、ちょっと地味な感じかな。鼻が低くて眼が細くて。

菊子：日本人的。

キーパー：今日は太った先輩も部活に来ています。麻希ちゃんも澄子ちゃんもいる。

菊子：フルメンバーだね。

キーパー：しばらくすると先輩も「じゃ、俺もそろそろ帰ろうかなあ」と。

麻希：あ、今日は帰しませんよ！（笑）

澄子：夜のお誘いだー！朝まで帰さないって感じですよー！

キーパー：「そ、そんな眼で聖さんが僕を見ていたなんて……！」

麻希：まあ、とにかく。特別教室棟にある日本人形の絵って知っていますか？それについて詳しく知りたいんですよー！

キーパー：「ああ。クラスの女子が騒いでいたね」と、先輩は他人事って感じ。「詳しくは知らないよ。関心ないし」

麻希：それとなくクラスの女子にも聞いてみてくださいよ。詳しく出所とか。

キーパー：「えー……。でも、あまり当てにしないでくれよ」

麻希：当てにしていますよ♪

菊子：はい、あのっ、先輩に質問です！付き合っている人とかっていますか？

澄子：……おお、ストレートだな。

キーパー：先輩はぽっこり出た自分のお腹を撫でながら「お腹の子しか僕の理解者はいないんだよ」と、（笑）

澄子：先輩、私は理解者じゃないんですか？

キーパー：「いや、澄子君は大事な理解者だよ、さあ、手に手を取って子育てに励もうじゃないか！」

澄子：……。

キーパー：「……やっぱり君も理解者じゃないんだね」（笑）

澄子：17歳にして母親は、私には……ちょっと……心の準備が。（笑）

菊子：先輩には特定の理解者はまだいないということですかね。

キーパー：「残念ながら、彼女いない歴＝産まれてきてからの年月なのだ」（笑）

しばらく雑談をした後で、太った先輩は帰っていきます。それを見送ってから。

澄子：ねえねえ菊ちゃん、今の何？菊ちゃんもしかして先輩のこと好きだったの？

菊子：昨日部活の子に頼まれちゃってさ。

澄子：そうなんだ……！先輩にもそういう人がついに現れたんだね！（笑）

菊子：まあ、どこら辺がどうはまったのかはちょっと不明なんだけどね。

澄子：どんな人？どんな人？まとまるといいなあ。面白いな。

菊子：部活の子。どうなるかちょっと楽しみかな。さて、結果報告に行かねばな。

というわけで、菊子は陸上部へ。澄子と麻希は今日は特に用事もなく、帰宅です。

菊子 : 部月が終わった後、笹口さん呼び止める。

キーパー : 向こうも気にしていたようです。「どうだった？好きな人とかいないって？」

菊子 : そこまでは教えてもらえなかったけど、今は付き合っている人はいないって。

キーパー : 「そうかあ……。どうしようかなあ」

菊子 : まずは顔見知りになることじゃない？日にちはあまりないけどさ。お茶飲みおいでよ、部室に。

キーパー : 「でもさ、先輩……。もう1ヶ月くらいで来なくなっちゃうんだよ」

菊子 : だから、やるだけやらなきゃ。突然よりもジワジワいった方が……。

キーパー : 「でもジワジワいく暇ないじゃん？もういっそ告白しちゃおうかと思ったりもするの」

菊子 : 大丈夫だよ、だってまだ、えーと……

キーパー : 今は12月ですが、あと3日ほどでテスト前の部活停止期間です。テストが終わるとすぐ冬休み。冬休み明けは、3年生はセンター試験まで1週間くらい来るだけ。それが終わるともう来ません。

菊子 : うわーっ。どうせ告るならセンター後とかかなあ。

キーパー : 「でも、センター後だといつ会えるかわかんないんだよ？」

菊子 : まめに学校に来て張っているとか。ストーカーっぽくて嫌だけどね。(笑)

キーパー : 「それは落ち着かないよう……」

菊子 : あとは卒業式とか、確実に来る日を狙うとか。

澄子 : 早めに行って当たって砕けるとか。(笑)

麻希 : うん、いろんな手段があるね。

菊子 : ちなみにどこで先輩を知ったの？知ったというか……。

澄子 : ああ、それは聞いてみたい。どこで見初めたのか。(笑)

麻希 : すごい言い方だな。

キーパー : 「あのね、1年前の秋頃なんだけど。私、居残りしてて遅くなってたの。私、自転車で来てただけど、帰る時に自転車置き場の手前で鍵落としちゃって……。秋ってすぐ暗くなるじゃん？鍵が見つからなくなっちゃって」

菊子 : うわ。

キーパー : 「どんどん暗くなると、あそこまわりに草がいっぱい生えているでしょう。で、どうしようもなく泣きそうだったんだけど、一緒に探してくれた人がいて……」

菊子 : 自転車にまたがった王子様だ。(笑)

キーパー : 「でね、自転車の鍵見つけてから、近くの自販機であったかいココアをおごってもらったの……(うっとり)」

菊子 : 先輩、すごいことやるじゃん！

キーパー : 「その時は暗くて誰だかよくわからなかったんだけど」(笑)

菊子 : へえー……。なんか、お話みたい。

キーパー : 「こんな話したの初めてだよ、私。しゃべるだけで心臓ばくばく言っているよー」

澄子 : 恥じらっている。面白いな。

菊子 : 聞いたのも初めてだよ。ありがとう。(笑)

……。何故か一昔前の少女漫画みたいなノリになっております……。

SCENE 4 : コクハク

暦は12月6日（木）。

- 菊子 : お昼、澄子ちゃんだけに昨日の話をしたい。名前はまだ伏せたままで。
澄子 : 面白くなってきた……。o(^-^)o (笑)
麻希 : チョー他人事だ！
澄子 : だって他人事だもん。
キーパー : で、あなた達がお弁当を食べ終わって廊下を歩いている時、笹口さんが菊ちゃんに声をかけてきます。「香取さん、私……く、砕けてみる」
菊子 : え！？ いきなり？
麻希 : ……砕けるのか。
キーパー : 「香取さん……ついてきて」
菊子 : え！？ ……なんで？
キーパー : 「近くまでいいから！ 見えないところにいてくれればいいから……！ ダ、ダメ、かな？」
菊子 : なんか聞いちゃうのって悪い気がするし。……私は行かない。ごめんね。
キーパー : 「わかった。うん、いいよ、——笹口さん、今までありがとう」
菊子 : うわー、なんかそれ嫌ー。
麻希 : 本当に砕ける気満々っぽいぞ。
澄子 : まあ、砕けてさっぱりっていうのもありかな。
キーパー : 澄子ちゃん。菊ちゃんがついて来ないなあと思ったら、菊ちゃんが女子トイレの隅で誰かどこそこそしゃべっていました。あの子は、昨日人形の絵の前にいた子ですね。
澄子 : 彼女が行っちゃってから、菊ちゃん、今の子知り合い？
菊子 : (こくこく)
澄子 : あ、例の？ ……あ、そーなんだ！
菊子 : どうも……じかにコクる気らしい。
澄子 : え！ それはまた……。
菊子 : ……どうしよう。まあ、他人事だけどさあ。
澄子 : こういうのは下手に立ち入らない方がいいような気がするな、うん。
菊子 : でも先輩、きっとその時のことなんか覚えていないよね。覚えていたらそれこそ漫画だよな。
澄子 : 『ああ、君はあの時の！』とか。(笑)
菊子 : 『どうしていたのかずっと気になっていたんだよ！』って。(笑)
麻希 : 暗くて顔わかんなかったんでしょうが。(笑)

この日の放課後、麻希は熊谷君と共に太った先輩のいる3年2組に突撃敢行。
「うわさ話」について詳しい話を聞き出そうと試みます。

- キーパー : じゃ、太った先輩のいる3年2組の教室へ。先輩はまだいる。
麻希 : せんばーい！
キーパー : 念のため、<心理学>でちょっと振ってみてください。5%出ればいーから。
麻希 : ぐっ。(ころころ) 出ないです。
キーパー : はい。じゃ、先輩ちょっと落ち着かない感じがするな、くらい。
麻希 : 一言だけ！ 女子にあの話聞いてくれましたか？
キーパー : 「おお。聞いていないや、そういえば」
麻希 : 聞いていないんですか……。
キーパー : うーん、と考えてから隣の席の子に「この子たちオカルト研究会の人なんだけど、

ちよっといい？」と。相手は「えっ」と珍獣を見るような眼で見る。

麻希 : 慣れているさ！<(^)>

キーパー：「願いが叶う絵の話、調べているんだって。何か知らない？」と先輩が言うと、彼女は「へー、そうなんだ。あたしは知らないなあ……あ」と言って彼女はちよっと考えますが、「武藤ちゃーん！」と前方に声をかけると、斜め前の席の小柄な子が振り返る。「人形の絵の話、あたしに教えてくれたの、武藤ちゃんだったよね」

麻希 : なるほど。

キーパー：「オカルト研究会の人が話を聞きたいんだって」って言われると彼女は「えええっ」とあからさまに嫌な顔をする。

麻希 : それも慣れている。こっちから近寄っていくぜ！ ……あ、先輩、もういいです。
(笑)

キーパー：太った先輩は「俺は、じゃ、これで」とそそくさと荷物をとりまとめて、部室のある方向とは逆方向に出ていく。「ごめん、今からちよっと用事なんだ」と。

澄子 : これは……今まさに……(^m^)。 (笑)

麻希 : おかしいなあと思いつつも、興味は人形の方に向いています。ただいまご紹介にあずかりました私、聖麻希と申します。よろしくお願ひします。

キーパー：「はあ……」そこで最初の女の子が「じゃっ、あたしこれで！」って帰ろうとすると武藤さんが「えーっ、ダメだよー！」 (笑)

麻希 : 知っていること洗いざらい教えてください。人形の絵のいわれとか誰から聞いたとか、そういったことがわかると嬉しいんですが。

キーパー：武藤さん曰く「別に願いが叶う絵ってわけじゃないんだよ、あれは。ほら、体育の颯ちゃんいるじゃん？」——って、体育に井村颯子先生という若い女の子がいるんだけどね。「彼女ここが母校なんだけど、受験当時、美術部だったんだって。受験ですごい煮詰まった時、気晴らしと願掛けを兼ねてあの絵を描いて、そして希望の大学に合格したの。……なんで『願ひの叶う絵』っていう話になっちゃったんだろう」

麻希 : うーん……そんな感じじゃなかったなあ…… (つまらなそう)。

キーパー：ちなみに澄子ちゃんと菊ちゃんはどうする？

澄子 : 速攻、部活。

菊子 : 陸上。

キーパー：わかった。今日は笹口さんは陸上部には来ません。 (笑)

菊子 : うわ、やっぱりかー！

澄子 : 先輩は来ませんね？

キーパー：いや、いつもより遅めだったけど、先輩は来るよ。魂が抜けたような顔をしてぼーっとやってくる。「……やあ」

澄子 : 先輩、どうしたんですか？ ——幸せそう？

キーパー：ううん。放心してる。

菊子 : うわっ。どこに碎けてきたんだ、先輩。

澄子 : 先輩が碎けたのか？ ——先輩、どうしたんですか？ 今日はなんだかすごい疲れているみたい……。

キーパー：「うん……。いや……。なんでもな……いや、なんでもなくもないのか、でも、まあ、なんでもないよ……」 (笑)

澄子 : 先輩ほら、私でよければ。話すとちよっと楽になることもあるし。

キーパー：「いやあ、悩み事ってわけじゃないんだよ……ないんだけどさあ。やっぱり勿体ないかなあ。どうかなあ」 (笑)

麻希 : 『勿体ない？』

澄子 : 『自分には勿体ない』のかな？

キーパー：「もしもさ……今の時期告白されると……どうなんだろう……。俺、県外の大学しか

受ける予定ないしなあ」

澄子 :あ、そうなんですか。

キーパー : 「気持ちは嬉しかったけど。でも、これからセンターと二次.....。で、終わったら県外の大学で.....。——って、あ、香取さん、これ俺の話じゃないからね！」 (笑)

澄子 : はい。(笑いをこらえつつ) そんな場合もありますよね。でも、遠距離恋愛もあるんじゃないですか？

キーパー : 「遠距離って、少なくとも1年くらい付き合ってからやるもんじゃねえ？ もしもだよ。付き合うことにして、でもロクに会う機会もないまま県外になって、.....それで関係を維持できるかな？」

澄子 : そっか。まだお互いに.....何ていうんでしょう、盛り上がらないうちに遠距離とかは.....。

キーパー : 「俺は.....あ、俺じゃなくてその人は、相手を全然知らないわけだよ。名前も初めて知ったくらいで、それで遠距離恋愛はじめましょうってもねえ」

澄子 : そっか.....。そのお友達も残念がっているんですね。

キーパー : 「もう1年高校生活があればなあ」

菊子 : (ぼそっと)浪人というテもあるよね。

澄子 : いや、それはちょっと。(笑)

キーパー : 先輩は今日はほとんどそんな感じで、ぼーっとしている。

澄子 : そのお友達はその人に会って、気に入ったんですかね。いい感じだったんですかね。

キーパー : 「印象は悪くはないけど、一目惚れってわけでもない.....」

麻希 :人のことなのに詳しいな。(笑)

菊子 : それはナイショ。

キーパー : 先輩は一杯紅茶を飲んでから、「でも返事は早い方がいいよなあ.....」などとぶつぶつ言いながら帰っていく。

澄子 :やっぱりなあ。

麻希 : やっぱり？ (笑)

澄子 : 県外に行くというのは知らなかったけど。うん.....それならなおさらね。

キーパー : 菊ちゃんは今日は部活終わったら、どうする？

菊子 : うーん.....。気になるけれど、そのまま帰る。

一方そのころ。麻希は3年2組で聞いた話を元に、
絵の作者であるらしい体育の井村先生に話を聞きに行きました。

キーパー : 井村先生はダンス部の先生だよ。今は部活中か、体育準備室にいる。

麻希 : よし。——熊谷君。ダンス部に行くわよ！

キーパー : 彼は「え？ もういいんじゃないの？ 噂の流れはわかったし」と言う。

麻希 : じゃ、私だけで行ってくる！ ダンス部に行きます。

キーパー : 先生はいます。

麻希 : こんにちは、井村先生。オカ研の者ですけどもお伺いしたことがありまして。ちょっとお時間いいですか？

菊子 : 怪しい.....。

麻希 : 特別教室棟にある日本人形の絵、あれについてお聞きしたいんです。

キーパー : そう言われると先生の顔がちょっと曇りますが、「何を？」って聞いてきます。

麻希 : あれは先生が描かれていたそうですが、本当ですか？

キーパー : 「ええ.....」

麻希 : あの絵にまつわる噂が流れているのはご存じですか？ あの絵にお願い事をすると叶う、っていう噂です。

キーパー : 先生はほうっと安心したように一息ついて、「知らないわ」って言う。

麻希 :本当に知らないっぽい？

キーパー : 知らないみたい。

麻希 : 人形の絵のモデルになった人形を貸していただきたいんです。参考になればと思って

。キーパー : 「残念ね。あの人形はもう手元がないの。手放しちゃったのよ。保管もしておけないし」

麻希 : そんな、勿体ない.....。あんな素敵な人形を。(笑)

キーパー :ちよっと<心理学>振ってみてください。

麻希 : よっ。(ころころ) 出ない。

キーパー : 先生はこの話題を切り上げたいと思っていることはわかります。『もういいでしょう?』って感じ。

麻希 : じゃ、手放したって.....どんなふうに手放したんですか？

キーパー : 「骨董屋さんに売ってしまったの」

麻希 : どの骨董屋さんに売ったんですか？

キーパー : 「どこだったかなあ。もう、覚えていないわ」ここまでくればわかります。先生既にごまかしモードに入ってますね。

麻希 : そうですか。わかりました。それじゃ、また。

キーパー : 「.....また？」

その後、絵を廊下に飾った本人である美術の教師にも麻希は聞き込みをしたのですが、あまりたいした収穫はありませんでした。その日はそれで終わります。麻希は、土日を使って写真を現像しましたが、全て真っ黒。手がかりが入りません。

SCENE 5 : 嵐の前の

ゲーム中の暦は12月10日、月曜日。ぼちぼち怪奇話ぼくなってゆきます……。

キーパー：翌月曜日。菊ちゃんが学校に行くと、朝の教室に笹口さんが来て、あなたに「オッケーだったよ〜！」と。

澄子：な、なににっ！？

キーパー：「いろいろありがとう！」とそれだけ彼女はそれだけ言って去っていく。

菊子：……びっくり。本当か？

澄子：そ、そういう流れになるの？ 不思議だわ。オッケーなんだ。へえ……。

菊子：まあ、その場で拒否したわけではないらしいかったけれど、えー……。なんか変だよ。聞いていた話と違うんだけど。

澄子：先輩、気が変わった？ 別にいいけどね……。 (笑)

麻希：うわ。全然他人事だな。

菊子：何となく腑に落ちないけれど、まあいいか。

この日は3人バラバラに行動していました。放課後に合流することもなかったですし。各々の部活に出て、それなりに活動して、そして帰宅、という感じで……。

キーパー：で、放課後、オリエンテーリング部に先輩はちょっと顔を出す。

澄子：様子は？

キーパー：うーんと……わりと普通？ 考え事をしているふうではあるけれど。

澄子：先輩、お友達の悩み事は大丈夫でしたか？

キーパー：「ああ、あの友達の悩み事ね。なんだか、うまくまとまったみたいだよ」

澄子：へえ。よかったじゃないですか。

キーパー：「よかったのかなあ。よかったんだろうね。なんだか……そいつ、断るつもりで電話をかけたんだけど、気が付いたらOKしていたんだって」 (笑)

麻希：なるほど。

澄子：はあ……。きっと断りづらかったんでしょうかね。

キーパー：「そうだね……」で、ふと時間を見て「俺、5時半くらいまでここにいるから」ちなみにこの『5時半』っていうのは菊ちゃんが最近来る時間で、イコール陸上部が終わる時間なんですけどね。 (笑)

澄子：まあそんなことだろうな。待ち合わせしているんでしょうね。なんだ。フタをあけるとそうだったのね。だめじゃーん。

キーパー：でですね、差し支えなければこれから暦をかーっと移動させて年明けまでひっぱっていきたいと思います。

麻希：りょーかい。

キーパー：テストが終わり、クリスマス……はみんなどうやって祝うのかなあ。お友達とクリスマス会をするか、家族でケーキでも食べるか、そんなところでしょう。

菊子：なんかオカルト研、怖そうだよな。

キーパー：クリスマスの晩に儀式ってするもんかなあ？

麻希：ろうそく。魔法陣。皿の上に豚の生首。 (笑)

キーパー：そ、それはちょっと無理ですー。豚バラ200gぐらいだったら何とかなるんだけど。

という感じで、状況が一段落しているところで時間を一気に進めます。

SCENE 6 : ヒトガタの絵、人形の目

キーパー：ということで年が明け、新年1月8日（水）から3学期が開始されます。今日は始業式です。

菊子：今年こそはいい年になりますように。

キーパー：ふふふふふ……。怪奇現象のないいい年にね。

澄子：無事に卒業したいなー。そういう怪しいものは何もなく。

キーパー：『怪しいものから』卒業したい？

菊子：そうね。普通の高校生になりたい。

麻希：えー。普通の高校生は怪しいことに遭遇するものだ。

澄子：そんなことはない。それはオカ研の人だけで充分。

新年最初の学業日。3人ともすぐには帰らず、それぞれの部活動に向かうようです。
……この3人は所属部がバラバラだから、放課後は基本的に別行動なんですよ。

キーパー：菊ちゃん、陸上部は今日はミーティングだけです。

菊子：笹口さん情報がどのくらい部内に流れているかを知りたい。

キーパー：最近とみに明るいけど、ちょっと空回っている感じ。たまに相手の話を聞かずに自分の話ばかりしている——総じて、あまり評判はよくない。

菊子：ふうん……。

キーパー：あと、キョウコさんという人に相談をしている、みたいなことを言っていたらしい。

菊子：キョウコさんって誰？ って聞いてみる。

キーパー：話をしてくれた子は知らないらしい。

キーパー：澄子ちゃんはどうします？

澄子：どうしようかなあ。とりあえずだらだらしたい。部室に行こう。

キーパー：オリエンテーリング部に行くと、太った先輩がグタっとしながら入ってきます。目は落ち窪み、体重が2/3から1/2くらいに減っており、視線がきよろきよろと落ち着きない。

澄子：せ、先輩どうしたんですか？

麻希：誰だかわからないんじゃないか？（笑）

キーパー：「いや……うん……。友達のことなんだけどさ……その、例の」

澄子：ああ。そう言っていましたよね。

キーパー：「……常に『会わなきゃいけない』気がする。今が一番大事なのに。会っている時はいいんだけど、別れて帰ると落ち着かなくて、相手に電話をしてしまう……勉強も手につかない。その上最近よく眠れないみたいだし……」

澄子：その『お友達』はお勉強が手につかないわけですね。

キーパー：「あーっもう、休み中なんて同じ参考書開けたり開いたり、解いた問題の記憶がないなんてザラだし」

澄子：もうすぐ試験だし……。例えばその『お友達』はその彼女に『申し訳ないけれど試験前でお勉強もしなくちゃならないから、今まで通りに頻繁に連絡は取れないかもしれないよ』って言って、わかってもらうことはできないんですか。

キーパー：「いやあ……でも、それをやるとこっちが落ち着かなくなるというか……」

澄子：ああ……。彼女が怒っているとかそういうことじゃなくて……？

キーパー：「じゃなくて、『それはしてはいけない』ような、『何かに責め立てられているような』感じがするんだ」

澄子：責められている……？

キーパー：と言っているところで電話がブルブルっと動くと先輩はビクツとして。

澄子：先輩、電話かかってきたのなら席外しましょうか。——と、一応言ってみる。

キーパー：「いや、もう、行くよ」と先輩はばたばたと荷物をとりまとめる。「でも本当、参っているんだよ。今年入ってからほとんど寝ていないんだよ俺……じゃなくてそいつ」（笑）

澄子：……おっけーおっけー。お話を聞くだけで力になれなくてすいません。

キーパー：「いや、聞いてもらえるだけでも、そいつも気が楽になったと思うよ」（笑）

澄子：そうですか、私でよければまたいつでも。先輩も、その『お友達』のことでいろいろ心配でしょうけれどお気をつけて、お体を大事に。

キーパー：「うん……ありがとう」と、歩いていく途中でがたがたがたとよろける。

澄子：あああつ。先輩っ!?

キーパー：「あれっ……。ここは……。そうだ、部室だったな。どうも目がかすんでいけないや。——いや、そいつの話」（笑）

澄子：芸が細かいな。

キーパー：彼はふらふらと出ていく。

澄子：これはもう、目を背けるわけにはいかなくなってきた。（笑）

そろそろ事件編。キャラクター達も動きはじめます。

澄子：麻希ちゃんって携帯持っているの？

麻希：持っているよ。

澄子：とりあえず、先輩が出ていったら麻希ちゃんにかけてみる。

キーパー：じゃ、麻希ちゃんの携帯が鳴ります。ヒゲダンスの音楽が……。 （笑・さっきプレイヤー本人の携帯がヒゲダンスの音を発しておりました）

麻希：はい。

澄子：副島です。

麻希：名前が出るからわかりますよー？（笑）

澄子：麻希ちゃん、これからこっち来れない？ ちょっと相談事があるんだけど……。多分、お人形のこと。

麻希：（途端に乗り気になって）わかりました！

菊子：私も、部活のミーティングのあとでこっちに寄ってみる。

キーパー：——ではオリエンテーリング部に、3人揃います。

菊子：その後の笹口さん情報を。

澄子：私は先輩情報を。

菊子：……先輩はあからさまに変だね、それは。

麻希：そうですねー♪ やはりこれは調べてみる価値はありそうです！

澄子：嬉しそうに言うなー！ でもどうしたらいいのかなあ。何しよう。先輩みたいになっちゃっても困るし、笹口さんみたいになっても困るし。

菊子：先輩と笹口さんの尾行とか……？

キーパー：そんな話をしているとですね、……この部屋って階段登る音ってするよね？（オリエンテーリング部の部室は、階段下に設けてある天井が斜めな小部屋なのです）

澄子：そりゃあ、ぎしぎししているからね。

キーパー：かんかんかんっ、って軽くて早い音が聞こえてばたつと扉が開きます。やってきたのは菜穂ちゃん（注：第5話から出てきたNPCでクラスメイト。オリエンテーリング部に顔を出す女の子）で、「菊ちゃん澄子ちゃん大変だよ。先輩が倒れた！」

澄子：えーっ。行こう行こう、麻希ちゃんも来て！

菊子：どこでどこで？

キーパー：「さっき特別教室棟から男の人のすごい悲鳴が聞こえて、何かと思って行ってみたら人だかりがあって先輩が倒れてて……。多分、今は保健室かな」

澄子：先輩やつれていて、さっきからふらふらしていて心配だったんだ、とか言いながらーっ。

キーパー：「あ、先輩にしてはなんか変だと思ったのはしぼんでいたからだったんだ？」（笑）

麻希：し、しぼんでた……！？

澄子：その言い方はひどい。

キーパー：保健室に行くと、先輩が寝ていますが「はーッ、はーッ、はーッ」と目をつぶっているのに息が凄く荒い。

澄子：先輩。副島です。大丈夫ですか？

麻希：これが……？

菊子：先輩、なんだよね？

麻希：言われないとわからないかも。

キーパー：先輩は「あれ？ ……あれ？」と、がばっと起きてきよろきよろと。

澄子：あ、急に動かない方が。

キーパー：そうすると、やにわにあなたの手をがしっと掴んで「あれだよ……！ 俺のことは見ていた奴……！」

澄子：え。え？

キーパー：「見ていた目……！ あれだ！」と言うとあなたをばしっと押しつけてがばっと立ち上がり、そのまま保健室を出て突っ走っていく。

澄子：ああっ、先輩一つ。

菊子：追いかけるよ。

キーパー：あなた達が追いつくと、先輩は特別教室棟の絵の前に仁王立ちになって息切れしているんだけど、がばっと人形の絵をもぎはずす。「これだ……これだ……これだ……！！ お前だあああ一つ」

菊子：抑え込む。

澄子：（冷静に）麻希ちゃん、絵、確保ね。

麻希：言われてなくても！

キーパー：「これだああ！ 何とかしてくれ！」

麻希：わかりました、何とかしましょう♪ それを持って走っていこう。

キーパー：それは無理。先輩はしっかり握っていて離さない。「なくなっしまえ！ 燃やしてしまえええ！」と先輩はがっつと絵をもって焼却炉のところに向かっていく。

菊子：うわ、だめだめっ。押さえる。押さえない。

キーパー：先輩は本気で振り切ろうとします。押さえる判定、代表して誰か一人……じゃ、言いだっしぺの菊ちゃん。澄子ちゃんと麻希ちゃんのぶんを1点ずつ追加して、CONで判定してください。先輩のCONとの対抗ロールになります。

菊子：（ころころ）……60。

キーパー：CON11に対して60%だから、かろうじて先輩の能力値の方が勝っているな。先輩はあなたを振りきって、燃えくすぶっている焼却炉の中に絵を投げ込む。

【対抗判定について】

誰かと何かを競う場合、互いの能力値から目標値を算出し、能動側が判定をします。計算の式は『（能動側能力値－受動側能力値）×5＋50＝目標値％』で、今回は『（9（菊子のCON）－11（相手のCON）×5）＋50＝40％』が目標値となります。……とはいえいちいち計算するのは面倒なので、目標値は専用の表を用いて出しています。

菊子：そこら辺に棒があるはずだから、掻き出す。

キーパー：……ん。それは判定はいらぬですね。掻き出せませぬ。

菊子：額に入っていたから、絵自体は無事だよね。

キーパー：ちよっとボロけた状態だけど、絵自体は何とか無事。先輩は「何するんだ、その絵を早く燃やすんだ。あの目が、あの目が俺を見ているんだああ！」

澄子：わかりました先輩、ちよっと落ち着いて保健室に行きましょう。

キーパー：「いや、その絵がある限り俺は落ち着かないんだ！ 燃やせ燃やせ今すぐ燃やせ！」

麻希：わかりました、何とかしましょう♪（←嬉しそうだ……）

澄子：必ずこっちで処分しますから。

キーパー：「本当に？ いつする？ 俺も立ち会うから、今日じゅうに処分するんだ！」

澄子：……今、何時？

菊子：まだ昼だよ。夕方には何とかなるといいな。

澄子：わかりました、今日じゅうにやりましょう。だからそれまで先輩……。

キーパー：「絶対っ、絶対呼んでくれよ！」

澄子：保健室の先生まだいるはずだから、保健室まで連れて行って……。こういうことを高校生が言っているのかな？ ——先生、とっても不安定になっているみたいなので落ち着かせてください。最近眠れていないみたいです。

キーパー：保健室の先生は、「オオタ君、大丈夫だからね、安心してね」と穏やかに声をかけながら中に連れて行きます。しばらく保健室の向こうで何か先輩が言っている声がしますが、次第に静かになっていきます。

澄子：眠ってくれ、本当に。

菊子：「オオタ君」だったの？

キーパー：太った田んぼと書いて「太田君」と読むの。フルネーム太田大。（笑）

太った先輩を保健室に休ませ、3人はまず絵を描いた井村先生のところに行きます。絵を処分するにはまず本人の了解が必要だよ、ということ。

澄子：とりあえず先生のところに行きましょう。

キーパー：絵を描いた本人のところだね。今日の井村先生は体育準備室で仕事をしています。

麻希：こんにちは。

澄子：麻希ちゃんは待ってて。なんか印象悪そうだったから。（笑）

菊子：コンコン。失礼します。……まさか「〇年×組誰々」とか言わなくていいよね？

キーパー：いいよ。教務員室よりはしっかりと「失礼します」って言って入らないとだめだけどね。

澄子：うん、それはそうだと思う。体育会系ですから。（笑）

キーパー：あなたがたが井村先生のところ近づくと「私？」って顔をあげる。

澄子：2年7組の副島といいます。先生にちょっとご相談があるんですが、今お時間よろしいですか。

キーパー：彼女は1年生の時の体育の先生だったので、あなたのことは覚えています。「いいよ？ なに？」と。

澄子：あ、すみません——小声で、できれば先生一人にお話ししたいので、他の先生がいるとちょっと話づらいので……。

キーパー：先生は一瞬きよとんとしますが、『ああ、悩み事か何かかな』と解釈したようです。（笑）

麻希：ある意味違わないけどね。

キーパー：「どこにしましょうか」と言いながら、椅子から立ち上がる。で、体育準備室から出てきて……麻希ちゃんを見る。（笑）

麻希：こんにちは～。

キーパー：「彼女も？」

澄子：彼女もそうなんですけれど、困っているのは私たちと先輩なんです。ここだと誰かに聞かれていると言にくいことなので……。

キーパー：先生は「わかった、OK。話聞くから」と言って近くの空き教室に入ります。

澄子：実は今日、部活の先輩が倒れまして……と、今まで起こったことを順を追って話します。去年の付き合いはじまるちょっと前のことも全部話します。

菊子 : 燃え残った絵を渡して見せます。

キーパー : そう言われると彼女は「ちょっと待っててね、5分、ええと10分くらいで戻ってくるから」と言って席を立つ。……で、15分くらい経つけれど、戻ってこない。

菊子 : あれ? ちょっと見てくる? どっちかな……。

キーパー : じゃ、あなたたちが教室から出たところで体育館方向から戻ってきた先生に会います。彼女は頭を抱えて「どうしよう、ないよ……。絵のモデルになった人形、なくなっているの。ステージの後ろに置いておいたのに」

麻希 : 先生、骨董屋さんに売っちゃったって言ったじゃないですかー。

キーパー : 「あ、ごめん。それはあなたを誤魔化すための嘘」(笑)

麻希 : そうはつきり言われると返す言葉がないですけど!

澄子 : その人形って、何か特別なものなんですか?

キーパー : 「うん。……まあいいや、一旦教室に戻ろう」

菊子 : はい。

キーパー : で、さっきの教室に戻ります。「願掛けで絵を描いたのはそうなんだよ。でもあの絵を描いてから、金縛りとか幽体離脱みたいな奴が起きて……」

菊子 : うわあああ……。

キーパー : 「それで気味が悪くなって、人形を神社に持っていってお祓いをしてもらったの。神社の人がいい人で話を聞いてくれて、人形を箱に入れてくれてくれたのよ。けれど神社に置いておくより学校に置いておく方がいいと言われたから、持って帰ってきたの」

澄子 : その神社の場所と神主さん、どなたか教えてもらってもいいですか。

キーパー : 神社はここから4駅ほど離れた涅槃神社というところですよ。(笑)

麻希 : やばい名前だなあ。

キーパー : 登山の山としても親しまれている涅槃山のふもとにある神社で、この辺の一宮といわれており、秋には菊祭りがある……。

麻希 : ロープウェイがあつたりするんですね。(←地元ネタ)

澄子 : 人形は先生の私物だったんですか?

キーパー : 「いいえ。たまたま美術準備室の整理をしていて見つけて、ふと描いてみたくなったのよ」

澄子 : 先生、すいませんけれどももう少し探して貰ってもいいですか。あと、この絵についてはもしかすると処分することになるかもしれないんですけど、それは構わないですか?

キーパー : 「あ、ぜんぜん問題ないよ!」むしろ歓迎、って感じで。

麻希 : ……なあんだ。

澄子 : じゃ、私たちちょっと涅槃神社の神主さんにお話を聞いてきます。

菊子 : 行く前に一応、美術準備室を調べてみる。誰かがそこに戻しているかもしれないし。

キーパー : はい。この場合<目星>だね。

菊子 : はい。(ころころ)98って何?

麻希 : (ころころ)失敗。

澄子 : (ころころ)おお、成功。

キーパー : じゃあ、美術準備室の隅でそれっぽい箱が見つかります。木製の化粧箱で結構古い。外側にお札みたいなので封がされていたんだけど、今は破れている。箱の中には紙がもう一枚。

菊子 : 書いてある字とか読める?

キーパー : <歴史>で。古文書読むようなノリだから。

澄子 : <歴史>はあるぞー。(ころころ)おお、03。目がいいな。

キーパー : 箱の封だった方は1枚はちゃんとしたお札。もう1枚は『鎮まりたまえ』といった長々とした文章が書いてある。末尾には手書きで涅槃神社の印が入っている。

澄子 : この箱も持っていった方がいいよね?

菊子 : このままだとあれだから、紙袋にでも入れて……。あと、先輩はどうする?

麻希 : 連れていっても邪魔になるだけだと思いますよ。

澄子 : また『早くしろー』とか言うから、素直に眠ってもらった方がいいと思うよ。

菊子 : じゃ、行く前に保健室に声をかけて……。

キーパー : じゃ、保健室のからっと戸を開ける音に先輩は反応して、がぼっと起きあがる。

澄子 : 先生は？

キーパー : 先生もその音で「あれ？」って近づいてくる。でも先輩は構わずに「どうなった？ 絵はどうなった？ 目がまだ見ているううう！」って。先生が「何もないよ、何もないよ」って抑えている。

澄子 : ええとですね、もう少しだけ待っていてください。

キーパー : 先輩の頭の中には言葉はすーっと入って抜けていっているようです。先生が「はい、はい……」と肩を押す形で横になる。

澄子 : 先生、ちょっと眠らせておいてもらえませんか。

キーパー : 「そうね。さっきまで眠っていたはずなのに。過敏になっているのね」

澄子 : 刺激したのがよくなかったんですね。

キーパー : 「どうしちゃったのかなあ。普段は保健室のお世話になるような子じゃないんだけどね、おおらかで」

SCENE 7 : 神の社で出会った人と

というわけで、3人は涅槃神社に向かいます。

涅槃神社のある涅槃駅までは、JR涅槃線の列車が1時間半に1本の割合で出ています。

麻希 : 帰り、最終には間に合いそうですね。

キーパー : あ、絵は誰が持っている？

菊子 : はい。絵と、箱と一緒に持っている。

キーパー : 麻希ちゃん。なんだか人形の絵が人の手にあるのが落ち着かない。自分が持っていた方が落ち着くんじゃないかという気がする。(笑)

麻希 : うっ。(笑)

澄子 : ま、まずいよー！

麻希 : その絵、私持っていたらダメですか？

澄子 : どうして？

麻希 : 何となく興味があるんですよ。

菊子 : いいけど、やばくない？大丈夫？

麻希 : 誰が持ってもやばいことにはかわりないです。

澄子 :それはなんだか気になるから、持ってないでいて。

麻希 : ええ〜っ。

澄子 : お預け！

麻希 : しゅーん。私その絵、好きなんだけどなあ。

澄子 : 納得する？

キーパー : うん、それはいいみたい。けど、今は諦めるけれど、絵を燃やしたくないなあ、なくなるのは嫌だなあって感じてしまうかね。

澄子 : どうなんだろうなあ。持たせると、いざというときに持って逃げられそうな気がして嫌なんだけれど。

麻希 : 持って逃げるかどうかはわからないけど、燃やそうとすると拒否するんだろうなあ。

4時過ぎに涅槃神社に到着です。

菊子 : 駅を降りて即行で神社に。社務所に行きます。

キーパー : 社務所では奥から若い男の人が出てきます。「何でしょう」

澄子 : すいません。以前こちらでお祓い.....かな、お祓いというか封印をしていたいただいたものについてのお話を聞きたいんですけど。

キーパー : 「ふ、封印？」と彼はちょっと要領の得ない表情をしています、「あの.....心当たりのある者がいるかどうか確認してきます。とりあえずこちらにどうぞ」って、広めの畳の部屋に通されます。「ちょっと待っていてください」って、彼はいなくなる。

彼がいなくなってわりとすぐに、一人の老人がやってきます。痩せてはいるけれど歩き方はしゃっきりしていて、翁のお面のような柔和な表情のじいちゃん。

菊子 : あ、いいねえ。

キーパー : いかにもこれからどこかのお祓いに行くんだよ、っていう盛装をしています。で、そのままずかすかと思ってきてあなた達の前の座布団に座り「どうなさった？」と。

澄子 : はい。実はですね、とかくかくしかじかと一から全部話をします。

菊子 : で、これがその絵です。これがその箱です。

キーパー : 渡されたものを手に取ります。「うむ。これは確かにわしが書いたものじゃな。あれからそう何年も経っていないのじゃが.....」と嘆息する。

澄子 : そんなにひどいですか。

キーパー : 「誰も触らないところに保管しておいてくれと言うたに。もつとも、人形自身の気持

ちが強かったせいじゃろうが」

菊子 : う。やっぱり最初の人形自身が危なかったと.....。

キーパー : 「人形とは空のうつわじゃ。災難も苦痛も生前の想いすら、自身のものにする。想いを取り込んだ人形はそのものが災難となり苦痛となることもある.....」と、最後は独り言みたいな感じで。

澄子 : それで、これからどうしたらいいでしょうか。

キーパー : 「絵は預かっておこう」

麻希 : え！？ ダメですよー！！ 私、それ欲しいのに.....。

澄子 : わがまま言わないの！

キーパー : 「む。おぬしも人形の器になりかけておるな。きっと惹かれあうものがあつたんじゃろう」(笑)

澄子 : あるなあ.....。

キーパー : 「これではいかんな」とあなたの前までやってきて、あなたの額にひんやりとした手が置かれます。で、なんかちよつと息苦しい。

麻希 : 拒否する。

キーパー : 「ちよつと大人しくしておれ」と彼はいいますが.....麻希ちゃん、再度SANチェックをお願いします。

麻希 : (ころころ)だめ。スワップなら成功なのに.....！

キーパー : SANを2点減らしておいてください。何か、入った時には認識できなかったものがあなたにはよくわかる形で頭のとっぺんから抜けていく感じ。

菊子 : うわー。嫌だー。

【正気度の減少】

SANチェックに失敗すると(時には成功したときですら)、正気度が減少します。

減り方は、その時に直面している怪奇現象の内容によって様々です。

目安としては、『体の一部を発見してSANチェックに失敗すると、d3点減少』です。(どんな目安だ(^_^;)

現在正気度が低くなればなるほど、キャラクターは精神の平衡が保てなくなります。

キーパー : そうすると、私さつきすごいわがまま言っちゃったけれどなんでだろう、って。

麻希 : すっきりしたっていう感じなのかな。

キーパー : うん。絵を持っていたっていう欲求がなくなって、逆に、なんであの時あんなに持たせて欲しいって思ってしまったんだろう、って思う。

澄子 : やっぱり取り憑かれてしまった系なんだね。

麻希 : それは貴重な体験！

澄子 : 喜ぶな！ まだ解決していないんだ。

キーパー : じいちゃんは袖口から一枚お札を出します。箱の上に乗せて「再び人形をこの箱の中に入れ、その封をするがいい。一度封をしたら決して開けてはいかん」

澄子 : 封をしたらこちらに持ってきて預かっていただくとか、そういうことはしていただけますか？

キーパー : 「いや。むしろそのまま学舎に置いておくがいい」

澄子 : そうしたら、また開けられてしまうかもしれません。

キーパー : 「そうならない場所に置く、それがお前さん達の役目じゃ。.....わしの力も限りがある、いたしかたあるまい」.....老人はすつと立ち上がって「では、わしはもう消える」と。

澄子 : あ、すいません！ その前にひとつだけ。この絵はこちらでずっと預かっていただけの事ですよ。絵と人形が離れていて問題が起こることはないですか？

キーパー : 「絵のことは心配するな。絵は人形にとって外を覗く窓のようなものゆえ」

澄子 : よろしくお願ひいたします。

キーパー：で、彼はその場がらいなくなる。と入れ違いに、さっき玄関に迎えに来てくれたお兄ちゃんがお茶を持ってやってきて「すみません、今、たまたま人がいなくて……とりあえず僕がお話を聞きますんで」と言いながらお茶を出す。

3人：……………。

菊子：……『消えるぞ』って言ったね、今のじいちゃん。

麻希：確かにね……。

澄子：つかぬことをうかがいますが、こちら最近代替わりなさったとかそういうことですか……？

キーパー：「はい？」と彼はきよとんとして「何人かは常に入れ替わりがありますが……」

澄子：ええと……。また日を改めてお伺いします。

キーパー：彼はきよとんとして「え、いいんですか？」

澄子：はい。どうもお手数かけまして申し訳ありませんでした。

キーパー：……というわけで。貴重な体験をしたということでSANチェックをお願いします。

麻希：本当に貴重だな。（ころころ）出ないよ。

キーパー：みんな仲良く失敗だね。1d3点ずつ減らしておいてくれ。

澄子：（ころころ）よかった、1点だよー。

麻希：2点だ。

帰りは何事もなく、電車に乗って黄泉市に戻ってきます。

キーパー：そのまま電車に乗って帰ってくると、駅に着いて6時。

菊子：私、学校にまだお弁当とか置きっぱなしのような気がする。（笑）

澄子：笹口さんのお家はどの辺なのかな？

キーパー：菊ちゃん、お家の場所を知っているかどうかアイデアロールで振ってみてください。

菊子：（ころころ）84。なんでー！？

キーパー：住所、知らない。

澄子：どっちにしろ、一旦学校に戻らないとだね。

菊子：戻ったらまず笹口さんの下駄箱確認。いるかどうか。

キーパー：いません。学校はだいぶ暗いです。そろそろ施錠の時間です。

澄子：どうしよう。ロッカーとか見てみる？

菊子：そうだね、いないうちに。机の中とか漁らせてもらいます。私と違って、結構からっぽだったりする？

キーパー：机を見たのは菊ちゃん？ 菊ちゃんが机の中をのぞき込むと本が1、2冊と、細々したものが入っているようです。

菊子：人いないよね。——ごめんなさい、漁らせてください！

キーパー：では、手を突っ込むとですね、細くて長い房状の束にふわっと触った感じがして、引っ張り出すと手に長く大量の髪の毛が腕にまとわりついてくる！

菊子：……！（硬直）

澄子：何、え、髪の毛だけ！？

キーパー：あ、菊ちゃんが固まっているのに気が付いてはっと見ると、もうありません。

菊子：自分で掴んでいる感じもない？

キーパー：さっき一瞬、そう見たの。今はない。——SANチェック。

菊子：（ころころ）96。

キーパー：わーい。じゃ、3点のSAN値を減らしておいてください。

菊子：いやあああーっ。

キーパー：今も、人差し指から肘側にかけて髪の毛が2本ほどまとわりついている。

菊子：今も？ やあ……。

澄子 : どうしたの、菊ちゃん？

菊子 : 嘘。やだやだやだやだ。(←泣きそう)

澄子 : 菊ちゃん、その髪の毛取れる？ あの、箱にしまっておいた方がいいんじゃない、かなー。

菊子 : 箱、箱どこ箱どこ。

キーパー : 外すのはOKです。ちなみに菊ちゃんも笹口さんもこんな長さの髪の毛じゃありません。机の中には教科書とか手帳とかが入っているだけ。

澄子 : あとはロッカーがあると思うんだけど。

キーパー : そうですね。開けますか？ 誰が開けますか？

菊子 :開けて。

麻希 : 開けちゃえばいいじゃないですか。がちや。

澄子・菊子 : おおー。

キーパー : 大丈夫、ロッカーの中は何もありません。

澄子 : あとしまっておけるような所はないよね.....。

菊子 : あと教室の隅に目が光っているとかはしませんか。

澄子 : 見られている感じとかはしませんか？

キーパー : はあ、いいことに気が付きました。けどそう思うなら見られているような気にもなります。気のせいだよって思えば、気のせいと思えなくもない.....かどうかはちょっと難しい。

(笑)

菊子 : 陸上部のロッカーも探してみる？ あるかどうかはわからないけれど。

キーパー : そっちの方は別に何もありません。そちらのロッカーは公共使用性が強いからね。

麻希 : じゃあ、学校の中に隠してあるとは考えにくいな。

校内の調査はその辺で一区切り。

.....というか3人とも、元々人形が校内にあるとは思っていなかったようです。

多分人形は本人の家にあるだろうけれど、一応校内も調べましょう、って感じでした。

澄子 : あとは.....。笹口さんのおうちを調べて、いかにして人形のあるところまで行くかだよね。

菊子 : 名簿で笹口さんの住所と電話番号。

キーパー : 黄泉駅から南側に駅1つ。冬場は電車通学。本当はチャリの許可取ってないけど、でも自転車に来ているの。

菊子 : それは、鍵なくしたとは先生には言えないね。

澄子 : 菊ちゃんは、笹口さんとはそんなに親しいわけではない？

キーパー : 『香取さん』『笹口さん』の間柄。今回、相談したせいで急速に親しくなった、って感じ。

麻希 : どっちかというとな時間が問題なような気がするが。

澄子 : 笹口さんの携帯の番号を知っていたりする？

菊子 : 陸上部の緊急連絡網とか。

キーパー : アイディアロールに成功したら菊ちゃんも番号を知っていることにしましょう。

菊子 : えい。(ころころ) 出た出た出た！

キーパー : じゃ、携帯の番号は交換していました。

澄子 : どうしようかなあ.....。明日まで待つ？

麻希 : 先輩の手前、今日中にしてしまいたいところですが、この時間お邪魔するのはね、って思っちゃうなあ。

菊子 : 『先輩とのことで相談がある』とかいって行っちゃおうかなあ、笹口さんち。

澄子 : 『もし迷惑でなければこれからでもいい？』って感じで。

菊子 : うん。ちょっと具合悪くして云々、っていうのも絡めて。それで部屋にあげてもら

ことを目的にして。

澄子 : そんな感じでいってみますか。じゃ、菊ちゃん電話をしてください。

キーパー : はい。では電話すると、ツーコールくらいですぐ出て……あれ、携帯ってかけた人の名前出るのかな？

菊子 : でも私どこからかけるんだろう。公衆電話から？

澄子 : 公衆電話からだったら『公衆電話』って出る可能性が高い。

キーパー : じゃ、電話の向こうはしばらく黙っています。すすり泣くような音がしてから「……センパイ？」って。

菊子 : あ、ごめん。あたし。香取です。笹口さん、今お話、大丈夫？

キーパー : 電話の向こうでは泣き声が出ます。

菊子 : どうしたの？

キーパー : 「香子さん……香子さんがいなくなっちゃう……。どうしてあんなことしたの……！？ ひどいよ！！」ぶちっ。

菊子 : うわ。

澄子 : 筒抜けでございましたね。

麻希 : 筒抜けなのは、まあ、わからなくはないとして……。

菊子 : 行きましょう、彼女の家。一駅だから、電車いいのがなかったらチャリで行く。

澄子 : 先輩はどうかなあ。今日じゅうというのはかなり難しくなってきましたね。

麻希 : どのみち絵を燃やすことに立ち合わせるのも無理じゃないですか。

キーパー : と、澄子ちゃんの携帯が鳴ります。太った先輩からですね。

澄子 : はい。出ます。

キーパー : ずいぶんと生気のない声ですが、さっきみたいな変なテンションの高さがない。「迷惑かけてごめんな」って。

澄子 : いいえ。先輩、具合はどうですか？

キーパー : 「まあ、だいぶ……まし、かな」

澄子 : 今はどこですか、まだ保健室ですか？

キーパー : 「今はまだ学校、保健室。今から親に迎えにきてもらうところ。さっきさあ、俺の友達が……じゃなくって、……ああ、もういいや！ 実は副島さん」

澄子 : は、はい。

キーパー : 「今まで相談していた話なんだけど、あれ……友達じゃないんだ！ 俺のことなんだよ！」（笑）

澄子 : 今更か！？（少しばかり演技っぽい）えっ、そ、そうなんですか！？（笑）

麻希 : しらじらしい。

澄子 : 笑うな、笑うな。

菊子 : 私は息をこらえて肩を震わせて。

キーパー : 「その、さっき彼女から電話があって、『もう部屋から出られない』とか『絵がなくなった』とかって。涙混じりで、最後には何を言っているかわからないくらい要領をえなくなつて……」

菊子 : うーん……。

キーパー : 「俺、逆にそう言われて正直ほつとしたんだけど……。今日は本当にごめん。どうして俺、あんなことしたのか自分でわからないよ」

澄子 : 先輩もいろいろ大変だったんですよ。

キーパー : 「俺、疲れているのかなあ……」

澄子 : うん、きっとそうですよ。

キーパー : 「とにかく、俺は今日は帰るわ。いろいろごめん。ありがとう」

澄子 : お大事に。あの、もしわかれば教えて欲しいんですけど、笹口さんって御家族と一緒に住んでいるんですよね、当然。

キーパー : 「うん。一人っ子だつて言っていたな」

澄子 : 彼女のお家は、ご両親は二人とも働いているんですかね？ 帰りは何時頃なんでしょう。

キーパー : 「お母さんはパートだからそれほど遅い時間じゃないけど」 (笑)

麻希 : むっ。

澄子 : 今日はもし電話があったら電話に出るんですか？

キーパー : 「.....多分出るね。なんかそんな気がする。.....俺、自分でかけちゃうかも」

麻希 : うわ。

人形の絵の問題が解決したことで気持ちが落ち着いたらしい太田先輩の件はこれでクリアなのですが、あとは人形を見つけて箱にしまう件について。やっぱり今日じゅうに、この件は何とかしておこうということになりました。

SCENE 8 : そして、遭遇

季節は冬、時間は7時近く。――既に外は真っ暗です。
友達宅を訪問するにはやや遅めですが、一気に笹口さん宅に向かいます。

菊子 : 行ってみよう。大丈夫よね、道。番地の住所がわかれば。

キーパー : さあやるか。澄子ちゃん、<ナビゲート>。

澄子 : (ころころ) はい、成功。

キーパー : 7時頃に着きます。新興住宅地で似たようなお家が並んでいる。家の手前には駐車スペースがあり、ちょっとした植木鉢が並んでいる。

菊子 : もう、電気ついてますか？

キーパー : リビングらしきところと2階の正面の部屋に電気がついていて、車はない。

澄子 : とりあえずピンポンかな。

キーパー : ドアチャイムの声の出るところから「はい？」って声がある。笹口さんの声じゃないですね。お母さんのようです。

菊子 : あらあら、いられるんだ。えーと……。陸上部の香取といいます。遅くすいません、咲良さん、いられますか？

キーパー : 「はい、ちょっと待ってくださいね」と言われてしばらく待たされて、また戻ってきて「すいません、咲良具合がよくない、って言っておりました.....でもわざわざこちらまで.....」ってかちやかちやって開けてくれる。

菊子 : いい人かもしれない。

キーパー : 開けてみて、3人もそこにいたのでちょっとびっくり。「もう1回呼んで来ますね」って。

澄子 : 遅くに申し訳有りません。

キーパー : 「お友達が来ているよ」ってトントン、って音がする。しばらく間をおいてコンコン「どうしたの？ どうして鍵をかけているの？」

菊子 : 鍵だって。一人っ子ってすげー！

キーパー : かちやっ、ってドアが開く音がするんだけど「お友達が来ているよ」って言われるとまたがちやっ閉めてしまう。で、「咲良、何しているの!？」って声が聞こえてからお母さんが慌ただしく降りてきて「すいません、今ちよっと.....」

菊子 : えーと、キョウコさんのことで、って言ってもらえますか。

澄子 : 朝からちよっと様子がおかしくて、それで心配になって来たんです。もし差し支えなければお2階にまで上がられてもらって、ドア越しにでもお話できないでしょうか。

キーパー : (ころころ) お母さんはとまどい気味で再度上に上がって行って、「キョウコちゃんって子のことだって？」って声がしますが、また降りてきます。「あの子、鍵、かけちゃってて.....。すいませんね、ご迷惑かけちゃっているのかしらね」

澄子 : あ、いえいえ、違います。

キーパー : お母さんは少し考えていますが、「とりあえず、じゃ、お2階までどうぞ」って言ってくれる。

菊子 : すみません、じゃ、お邪魔します。

キーパー : ドアはがちやっ開けるタイプです。中はしーんとしています。お母さんは「お友達がいるんだよ。出てこないのも失礼でしょう」って声が少しきつくなる。

菊子 : あ、そんなそんな、いいです。

澄子 : 遅くに来てしまった私たちも悪いんですし。もし下で何かお台所の方とかされているのでしたら.....。

キーパー : 「そう？」とお母さんは気にしながら階下に降りていく。

菊子 : ー一笹口、さん？

キーパー : しーん。

菊子 : うわあ〜。どうしようかな、どうしようかな。……その、キョウコさん、のことなんだけどさ。

キーパー : と言われると、ドアの向こうから「出てってよ！」って声がある。「香子さんは渡さないんだから！ 私のものなんだから！」

菊子 : どこで会ったんだよ〜。どこで会ったか教えてもらえる？ キョウコさんはやっぱりキョウコさんがいたところに戻った方がいいんじゃない？

キーパー : 「なんでそんなこと香取さんがわかるのよ!？」って。態度からすると、『キョウコさん』は自分のもので、周りの人は全てキョウコさんを奪う敵、って感じ。

麻希 : やっぱり、取り憑かれているんじゃないでしょうかね。

澄子 : そうなんだけど、ここで、お母さんもいるのに例えばー一できるできないの問題じゃなくてねー一扉を蹴破るとか、そういうことはできないし。(笑)

キーパー : 怒鳴り声があったりすると、お母さんは台所どころじゃなくて階下でおろおろしているようです。

澄子 : それはそうですね……。

麻希 : 合い鍵とかってないんでしょうか。

キーパー : 「合い鍵はあるけれど……」

菊子 : 音便に済ませたいけどなあ。

麻希 : だけど、これじゃあ埒があかないですよ。

菊子 : 人形はやっぱり、部屋に……？

澄子 : あるんでしょうね。どうしようかなあ。

3人 : ……。

菊子 : 中に入りたいなあ。

キーパー : お母さんもどうしていいかわからない。もう7時過ぎているし。「咲良も落ち着かないみたいだし、今日のところは帰っていただいて明日また、ってわけにはいかないのかしら。一日経てば落ち着くかもしれないし」

菊子 : あーうー……。

キーパー : (膠着しているみたいだから時間を進めてしまえ) そんなこんなで30分ほども経過しますと、今度はキーッて車が止まる音がして「ただいま」ってお父さんが帰ってくる。

菊子 : あ。うわっ。

キーパー : で、高校生3人と母親が2階にいるのが玄関から見えるから「何だ？」って上がってくる。そのタイミングで笹口さんが「お父さんまで香子さんを取りに来たのね!？」って。

菊子 : うわ。

キーパー : 言われたお父さんは「は？」って。お母さんが「咲良が出てこなくて、変な事ばかり言っているの」って言うとお父さんは「一体何をそんなにぐだぐだ言っているんだ。ちょっと貸しなさい」ってお母さんの手から合い鍵を取り上げて……。

菊子 : わ。わ。わ。わ。

キーパー : がちゃって開けちゃいます。

菊子 : あ。入っちゃう。

麻希 : 追って入っちゃおう。

キーパー : 開けた瞬間に目覚まし時計とかいろんなものが飛んできて、お父さんは「うわっ」って後ずさるんだけどね。

澄子 : それを避けながら入る。

キーパー : 部屋中には物が結構散乱してしまっていて、ドアの近くに軽いものや簡単なものを投げた形跡があるようです。

澄子 : 見える範囲に人形はありますか？

キーパー : 普通の女の子のお部屋。ベッドがあって、笹口さんはベッドの奥の窓との隙間にしゃ

がみ込んでいます。人形を抱き込んでいまして髪が覗いている。彼女は「出てってよ、出てってよ」って、片手で手近にあるものを投げる。もうほとんどないけど。

澄子 : お父さんとお母さんの反応はいかがなものでしょう。

キーパー : お父さんはあつけにとられています。

麻希 : うん、当然の反応だな。

キーパー : 「何をしているんだ」ってお父さんは言おうとするんだけど、それを遮るように笹口さんは悪口だのキョウコさんは渡さないだのみんな敵なんだとか太田先輩までひどいとか香取さんも副島さんも信じられないだのということを立て続けに言うから、お父さんは口を挟む余地がない。

澄子 : お父さんとお母さんにですね、申し訳ないんですけどちょっと席を外していただいてもよろしいですか。私たちにだけにさせてもらえれば彼女もちょっとお話をさせてもらえればきっと落ち着くと思いますので。

キーパー : じゃ、それに対してお父さんは何か言おうとするんだけど、お母さんがそれを抑えて「じゃ……」と2人して部屋を出て戸を閉めるんだけど、2人とも戸口にいるのはわかる。

澄子 : まあ、それはしょうがない。

という感じで、多少強引な展開ではありますが、これでようやく笹口さんの部屋へ。

麻希 : さて、どうしようかな。

キーパー : 彼女の言うこともだんだん支離滅裂になってきますが、叫ぶ気力もなくなったのかすすり泣きがメインになっていく。

菊子 : どこでキョウコさんに会ったの？

キーパー : と言われても、力無く首を振るだけで答えない。

澄子 : 笹口さん、私たちあなたに悪いことをしたいんじゃないのよ、と一応言います。

キーパー : 「嘘つき！ じゃあ何をしに来たの！」

澄子 : あなたが元のように戻るといいなと思ってきたのよ。

キーパー : 「そんなの望まない！ 香子さんがいればいいの、取り上げないでよ！」

菊子 : じゃあ先輩は？

キーパー : 「香子さんがいれば、先輩はいてくれるもの！」

菊子 : でもその間、先輩はずいぶんと具合を悪くしているよ。

キーパー : 「知らない、そんなの知らない」

澄子 : 今日学校で倒れたの、知らない？

キーパー : 「それだって、香子さんが何とかしてくれるもの……！」と彼女は繰り返す。彼女が身動きするはずみに人形の顔があなたの方の方を見た、感じがします。SANチェックお願いします。

澄子 : 成功。

キーパー : 全員成功？ みんな強いなあ。

麻希 : 慣れた。(笑)

キーパー : 人形は、くすっと笑った感じです。

澄子 : おじいさん……、どうしたらいいのかなあ。

菊子 : 近寄る。

キーパー : 彼女は身を竦めてますます部屋の隅に体を寄せます。

澄子 : 大丈夫、怖いことはないから。何も怖いことはないから。

キーパー : 「嫌。嫌々っ」

澄子 : キョウコさんってそのお人形さんなんでしょう、って聞く。あなたは今抱いているのはお人形さんじゃないの？

キーパー : 「香子さんだもん。香子さんは香子さんだもの。それだけだもの！」

麻希 : ……これは大変ですよー。

澄子 : スタンガンでも持ってくればよかった。……さてさて……。

キーパー : そのうち人形に向かってぶつぶつと「ひどいよね……ひどいよね……香子さん、もう私たちだけになっちゃったよ……」

麻希 : 非常に危険なんですけれど、一つ提案です。——無理矢理奪う。

澄子 : うん。……それしかないかな。やっぱり。

麻希 : すごい危険だと思いますよ。彼女というより、むしろその人形が。その場合、私たちだけじゃなくて彼女に危害が及ぶかも知れないんですよ。

菊子 : でも3対1だ。……3対2か？

澄子 : お父さんとお母さんがドアの前にいらっしやいますからね。一瞬で決めないと駄目ということだね。

麻希 : 少なくとも、私にはそれしか思いつきません。

澄子 : やりますか。もうだめっばいなー。

菊子 : 思い切り殴りましょうか、とりあえず。

キーパー : ずいぶん直接的だ。(笑)

澄子 : 怪我させるのはどうかなあと思うんだけど。できれば腕とかで抑えられればいいなあ。

菊子 : 押さえ込めればね。

澄子 : ベッドが壁際にあって窓がベッドの向こうにあると、彼女はこの間にいるんでしょう。3人で近づいていけばいいんじゃないの？ 2人で押さえつけて1人が奪う。

菊子 : じゃ、箱もここに出しておいて。

キーパー : はい。今回は力づくで奪うから、STRの対抗判定にしようと思うんだけど……って、菊ちゃんSTRすごいよね。(17あります。平均は10)

菊子 : うん。私、抑え込む方にはいるよ。

澄子 : (キャラシートを見て) じゃあ……。

麻希 : ん。わかりました。

キーパー : 麻希ちゃんが取るのね？ 今日は麻希ちゃんの厄日だなー。

澄子 : なんかそれも怖いな。

麻希 : 本人は厄日だと思っていないけどな！(笑)

キーパー : では、菊ちゃん澄子ちゃんが抑え込む。菊ちゃんのSTRすごいなあ。自動成功にはならないけど、90以下が出ればそっちの勝ちだよ。

菊子 : (ころころ) 30。

キーパー : なら全然OK。彼女は一層暴れだそうとするけれど押さえ込めます。

澄子 : 大丈夫。落ち着いて、落ち着いて。——さあ、麻希ちゃん！

麻希 : えいっ。

キーパー : 人形握りましたね。——(2d10を見せて) MPがこっだけ減るんですけど……。POW判定に成功したら半分にしてあげます。

菊子 : ちょっと待ってー！(麻希のMPは8点です)

麻希 : 了解。(ころころ) POW判定は4倍か。

キーパー : (オープンダイスころころ) あ……。いやーん、気絶させたかったのに！(笑)

菊子 : (2d10の出目を見て) 3点だ。大丈夫大丈夫。

キーパー : 半分の、1点だけ減らしておいてください……。あああ……麻希ちゃんならMP0にさせることもできた筈なのに……。(笑)

菊子 : 出目としてはありえたのにな。

キーパー : あーあ、マスタースクリーンのこっち側でやればよかったなあ。(笑)

麻希 : ふう。

キーパー : 持った瞬間、腕から先の力ががくっと抜けたような感じもします。

澄子 : 麻希ちゃん、頑張れ！

麻希 : 頑張っって箱の中に入れます。蓋します。札を……。

キーパー：箱に入れて蓋をすると、箱がかたっ……かたかたかたかたっ、と。

麻希：えいっ！ えいっ！

キーパー：かたかたかたかたかたっ……。

麻希：う、動いているよおお。

キーパー：しばらくすれば落ち着きます。まあ、今の楽しい体験から全員SANチェックをしてもらおうかね。

麻希：ぎゃふん。（ころころ）あ、成功した。

菊子：（ころころ）失敗した。今更箱でびびるなんて……！（笑）

澄子：笹口さんの様子は？

キーパー：ぐったりと力が抜けている様子です。

菊子：笹口さん？ 大丈夫！？ ペたペたペた。

キーパー：声をかけられるとぼーっと薄目を開けて、「……あれ？ 香取さん……え、なんで香取さんがいるの？」

菊子：えーと……。

キーパー：「なんで私こんなに体のあちこちが痛いんだろう。すごい疲れているし……」

菊子：うん、さっきまでちょっと……なんだろう。

キーパー：「あれ……。ごめん、なんだかすごく眠いよ……」

澄子：うん、ちょっと休んだ方がいいと思うよ。

キーパー：あなたが声をかけると、初めて存在に気づいたようで「……副島さん？」と。

澄子：うん、ごめんね、一緒にお邪魔しています。

キーパー：麻希ちゃんに対しては「……あなたは……？」（笑）

麻希：ああ、初めましてー。（笑）

キーパー：なんて言われている間にこっちはくーっと寝てしまいます。

澄子：じゃ、箱は紙袋に入れて！ お母さんに、お待たせしました、すいません。ちょっと彼女落ち着いたと思うので、今疲れて寝てしまいましたけれど。

キーパー：お母さんが「な、何だったの……？」

澄子：多分、あの、学校……このこととでちょっとストレスが溜まっていたんだと思います。

キーパー：「私、最近あの子と向き合っていなかったのかしら？」なんて悩んでいます。

菊子：そ、そんなことないです。ただちょっと最近いろいろあったんで。

キーパー：お父さんは最後まで要領をえないような表情をしています。

澄子：いいよ、わからなくて。

キーパー：外に出るともう8時前。完全に暗くて、空にはオリオン座なんかがはっきり見えます。

菊子：おお。冬だもんなあ。

あとはラストミッション。人形入りの箱を校内のどこにしまうのか、なのです。

この話は4年ほど前に行ったシナリオ『祟り』（ルールブックのサンプルシナリオです）にて、第一体育館裏にあった穴蔵状の祠のことです。蛇の神様が祭られていたところでした。

キーパーも忘れてました、そんな設定(^_^;)

キーパー：そんなところもあったねえ……。第一体育館の裏なので、入れます。

菊子：その辺の外系の部室の中にシャベルとかあるかな。あ、ペンライト持っているじゃん。ラッキー。

キーパー：では夜中の学校へ侵入。こそこそと……あ、こそこそじゃないか。普通に歩いていった方が目立たない。第一話のヘビ塚の大きな穴があります。体かがめて入ろうと思えば入れますね。

澄子 : え、穴に？

キーパー : うん。あの時わりとずんずんと中に入っていったもの。

菊子 : 手前にダミーで1回掘って、何かまた埋め戻した感じにしておいて。

キーパー : 夜中の校舎裏の密閉空間、楽しい体験だと思いますので.....その密閉空間そのものに耐えられるかどうか。SANチェックしてください。

麻希 : 閉所にして暗所だからなあ。(ころころ)駄目です。98とかいっています。

キーパー : 失敗した人は1点ずつ減らしておいてください。暗くて狭くて何か出てきそう~。

菊子 : 何もないのはわかるんだけど.....なんか、嫌。(←失敗している)

澄子 : 大丈夫だよ、何もないよ~。(←彼女だけ成功している)

キーパー : なんとか無事に終わらせることができます。

菊子 : もう出てくるなよ。お願いだから出てこないでね。

キーパー : ふっふっふ。マスターがシナリオのネタに欲しくなった時に出てくるのさ。(笑)

麻希 : それだ。

というわけで、ラストミッションもめでたく終了！

時間はもう既に9時くらいだったりします。冬場の9時っていったら真っ暗だよー。

麻希 : 遅くなっちゃったなあ、怒られそう。

菊子 : おなか空いちちゃったよ。

澄子 : 何か食べて帰る？

菊子 : 食べて帰ろうかなあ。電話して、食べて帰るって言って.....どこに食べに行くんだらう？

澄子 : GASTOとかだらう、女子高生が行きそうなところなんて。

菊子 : 明るくていいなあー。

キーパー : なら、ドリンクバーでも頼みながら、明るい.....というか眩しい、普通の人口の光の中でゴハンを食べる喜びを堪能してください。(笑)

澄子 : あったまろうね！

菊子 : 暖かい会話がしたいね！

澄子 :できるかなあ。黙々と食べていそうな気もするけれど。

キーパー : 外の暗い中に戻るのが嫌、みたいな？

麻希 : いつまでもこうしていたいー。

ENDING

キーパー：というわけでめでたく終わります。麻希ちゃん、オカ研のレポートにはどこまで書きます？

麻希：.....神社に持っていったところまでにしようかな。

澄子：ああ、それはいいね。それでめでたしめでたしでした、ということにしておけば。

菊子：そこでおしまい。

澄子：神主さんが処理してくれた、と。『しかしそんな神主さんはいなかった。あの老人とは一体！？』って感じでどうでしょうか。

キーパー：はい。そのレポートはオカ研内では評価が高く、『やはり次の部長は聖さんだね、彼女は部員をひっぱっていける人材だ』、っていうことになります。（笑）

麻希：それはどういう意味だろう.....？

キーパー：笹口さんは3日くらいお休みして、その後は普通に学校に出てきます。今回のことは、あまりはっきりとは覚えていないらしい。

菊子：ああ。その方がいいかも.....。

キーパー：菊ちゃんに恩があったこととか、澄子ちゃんが心配して家に来てくれたこととかの認識はあるらしい。――麻希ちゃんのことには覚えていない。（笑）

澄子：じゃ、先輩とはどうなったの？

キーパー：先輩には告ってOKがもらえたという状態で記憶が留まっている。先輩の方もちょっとずつ体重が戻っていつている。

菊子：おおー。

キーパー：センター試験はさんざんで、「俺、今年は浪人だよ」って言っているけどね。（笑）

澄子：うわ、またか。

麻希：予定通りじゃないですか。

キーパー：ですが、笹口さんとはうまくいつているようです。.....何故か知りませんが。「放っておけないところがいい」とか言ってます。

澄子：本当にわかんないけど、まあ.....いいんじゃないの。

キーパー：というわけで、めでたしめでたしです。どうもお疲れさまでした。

思いがけない展開にわたわたしてしまったりと、いろいろ反省点はありますが、

キーパーとしてはとっても楽しかったです(^^)

次回はもっとちゃんとプレイヤーを怖がらせることができるように努力するぞー。

放課後怪奇くらぶりプレイ 学校のおにんぎょう

<http://p.booklog.jp/book/51323>

著者：沢渡祥子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/swtr/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/51323>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/51323>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.